

計画 1-4

長野県南安曇郡二ホンザル地域個体群
の生態把握と保護管理
船越美穂(京都大・霊長類・社会生態)

近年、二ホンザルは全国的に自然の食物以外に農林産物や人工的な草地に頼って生活している。二ホンザルの生態把握と保護管理、保全の研究を具体的に進めるためにまず、二ホンザルの食性について調べる必要がある。そこで、農作物被害とカラマツ形成層剥皮被害がある、中部山岳地帯を含む長野県安曇野地方(岡田,1994)に調査地を設定し、4群を対象に農林産物の採食、自然の植物の採食状況、土地利用、環境を比較した。

1997年2月から12月まで、各群れをテレメトリ法を用いて追跡し、さらに採食調査には直接観察法と糞分析法を用いた。土地利用調査では環境庁1985年作成植生図を使用し、その中で分類された植生ごとに植生調査を行い環境調査とした。

農林作物の採食(被害)に関して群れ間で差が見られた。主要食物が多く存在する広葉樹林の面積が、年間行動域内に少ない群れで、被害が起こる傾向が見られた。

今後、全国レベルで二ホンザルをモデル動物とした動物と森林の保全計画を立てる。

計画 2-1

霊長類における自然法則の認識とその
発達
藤田和生(京都大・文・心理)

ヒト乳児は、動きや顔図形に関する種々の比較的複雑な知識を発達早期から示す。これら初期知識の進化的起源を探るため、二ホンザル乳児3頭に5種のビデオを見せた。①生物的運動-ヒトと二ホンザルの歩行の関節点の動き、②物体の統一性-帯の上下を2つの部品が同期して運動したとき上下の部品が一体であると認識するかに関する映像、③物体衝突時の因果関係-ある物体が別の物体の背後に隠れ、弾かれるように第3の物体が出てきたとき、衝突があったことを認識するかに関する映像、④顔図形、⑤音と動きの同期性-木箱をパイプで叩く映像と音が同期しているものと同期しないもの。これらを各30秒提示し、注視時間を測定した。実験は0日齢から14週齢まで、2~4週間間隔で反復した。その結果、サルは生物的運動については明瞭な結果が得られなかったが、ヒトの運動については、生物学的な脈絡を持った運動とそうでない運動が6-10週齢くらいで区別できるらしいことが示された。物体の統一性と衝突時の因果関係は明瞭な結果が見られなかった。顔図形では、線画を「顔」と認識する証拠は得られず、Conspec、Conlearnというヒトの顔認識メカニズムがサルに当てはまるのかに疑問が提示された。視聴覚刺激では、2週齢という早期からおとなと同じように視聴覚の同期性を認識することがわかった。なお、これ以外にアカゲザルの知覚的補間過程と、チンパンジーの時空間情報の統合過程に関する実験的分析をおこなった。